

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21720187

研究課題名(和文)

日本語学習者に必要な話し合いのコミュニケーション能力の研究

研究課題名(英文)

A conversation analytic study on L2 communicative competence necessary for various opinion-exchanging discussions

研究代表者 池田 佳子 (IKEDA KEIKO)

関西大学・国際部・准教授

研究者番号：90447847

研究成果の概要(和文)：

本研究では、日本語を第二言語(外国語)とする話者にとって積極的な会話参加はどのような状況下で困難または容易であるのか、そして会話の主導権を握るためにはどのような言語ストラテジーが必要であるのかを探求するために、学習者が参加する複数話者による会話行動の質的な分析を行う。検証を行うにあたり、学習者グループと母語話者グループに計5回(1回約30分)、様々な提示されたトピックについて話し合いをしてもらい、その談話資料をコーパスとして会話分析法を用いて検証を行った。また、その考察からサブ・テーマとして「伝達をする(コミュニケーション)能力」とはそもそも何か、どのようなリソースを用いて我々は相互行為的な伝達を行うのか、という問題にも敷衍し、話し合い場面の他にすでに資料として持っていた、教室内活動の場面なども加えて検証を行った。成果として、海外学術論文2本を研究期間中に出すことができたが、今後も本研究の成果の一部として2012年と2013年に2本、編著に掲載を予定している。

研究成果の概要(英文)：

In this project, I examined a particular social interactional context to “argue” and “discuss” with peers, and how L2 users of Japanese (and in comparison, L1 speakers of Japanese) would handle themselves in such a situation. These two groups which consisting of 3~4 people at one time engaged in a discussion for approximately 30 minutes each, for five times. The corpus of these discussions was analyzed using conversation analysis. Along with the main theme of this project, that is to investigate L2 speakers’ performance in arguing and discussing, another related theme has come up. The project then investigated how one interactionally delivers his/her opinion to others, i.e., re-considering what has been understood as communicative competence in general. In order to do so, the study has examined additional data such as classroom interaction. Two journal articles were published during the period of research, and two more papers are planned to come out as a chapter in a volume in 2012 and 2013.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：日本語教育・第二言語（外国語）学習・会話分析・社会言語学・談話分析

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：言語学習・会話分析・コミュニケーション能力・話し合い

1 研究開始当初の背景

日本社会に求められるコミュニケーション形態の変化として、年々進行する多文化共生社会化がある。従来回避されがちであった討論や意見交渉の場面が、近年我々の日常に増えている。2009年度に導入される裁判員制度、地方自治区が行う公開討論会、大学・大学院の教育場面でディベート、フォーカス・グループといった、「参加型・双方向型」コミュニケーションの奨励が顕著である（阿部他 1999）。一方で、「世界から日本へ人材を迎え入れる国際化」（2008年経済財政改革の基本方針）や「留学生30万人計画」（2007年教育再生会議）が謳われる昨今では、海外からの移民数は現在過去最高数に達し、現在もその数は急勾配で増加している。日本を居住拠点とする外国人長期滞在者・移民者にとっても、「話し合いのための論力」は、重要かつ必要な能力である。話し合いにおける積極的な参加は、学習者にとって大変高度な言語運用能力を要する。複数の話者が参加するため、発話権を適切に取得したり、ターンの維持を行ったりという会話管理面でも二者対面のコミュニケーションとは大きく異なる。このため、高い言語能力が認められている日本語学習者でも、話し合い場面ではコミュニケーション・ブレイクダウン（会話の流れの停滞）を招きやすい。議論展開の停滞を回避できても、母語話者にリードを任せただけの「周辺的な参加」のみで終わってしまうことが多い。これらの問題の解決策を探る必要があることが、研究開始当初の背景にある。

2 研究の目的

本研究は、日本語を第二言語（外国語）とする話者にとって、積極的な会話参加はどのような状況下で困難または容易であるのか、そして会話の主導権を握るためにはどのような言語戦略が必要であるのかを探求するために、学習者が参加する複数話者による会話行動の質的な分析を行うことを目的としている。

3 研究の方法

まず、2年間における研究期間の中で、まず学習者だけで話し合いの場においてどのような言語実践を行うことができるのか、母語話者グループの実践内容と比較できるよう

な談話資料の収集を行い、会話分析を用いた分析法において質的な検証を行った。

段階1：日本語母語話者間、日本語学習者間、の2種類のグループによる話し合いの場面の会話データをH22~23年度の秋にかけて集積した。当初予定していた中上級レベルの学習者データの他に、初級レベルの学習者同士における話し合い場面も検証対象とした。これは、先行研究などにおいては言語能力と話し合いにおけるコミュニケーション能力を同様のものであるとみなす傾向にある中、昨今の研究では初級段階の学習者においても対話を展開する能力、さらには意見を展開する能力は様々なリソースを援用することによって可能であるという主張がなされており、この点を実際の資料をもって本研究においても検証するために追加した。

段階2：会話終了後、数週間後に各参加者と応募者によるフォローアップ・インタビューを行い、話し合いをする際に困難だと感じている点などについて話してもらった。

段階3：談話資料の分析

以下の点に焦点をあてて、質的な検証をおこなった。

- ① 発話権取得に使用した言語・非言語リソース
- ② 他者の発言を受けた際に行う聞き手としての言語・非言語ストラテジー
- ③ 発話取得後、自分の意見を展開する上で使用した言語表現
- ④ 意見が対立した際の反論を行う上で使用した言語表現

上記に加え、本研究では、学習者らの話し合いの場におけるコミュニケーション能力が培われる場として、教室内の活動が大きな鍵を握ると判断し、日本語教室における上記の計画していた検証を行う中で、自分の意見を相手に説得させるという実践にとくに着目し、①言語スタイルの学習者独自の手法での利用、そして②ジェスチャー、視線などのマルチモダリティを活用したターン展開の2つの側面においてさらに考察を深めた。研究成果の節では、これら2点について実際の考察結果、および教室活動の考察からの示唆について述べる。

いずれの研究論文においても、共通して

①「相互行為のリソース」、そして②「L2 話者のコミュニケーション能力」という二つの問題点をテーマとした。

従来の言語学の視点で重視されがちであった言語リソース以外にも、相互行為を成し遂げるためには様々なリソースを我々は利用していると言う議論を展開した。議論、と言っても特に新しい論説なのではない。非言語的素材や、身体的素材（視線、表情、頭部の向き、上体の向き、身振り、動作、など）が大切であることは、コミュニケーションに深く関心を持つ我々は十分に承知している。しかし、第二言語習得（学習）研究ではこれらのリソースはえてしてこの点が背景化してしまい、分析では文法、語彙などに比べて周縁的扱いを受けてきたという現実がある。以下の研究成果においては、このデフォルト化しつつある優先順位をあえて覆そう、という意図で「相互行為のリソース」の中でも言語的リソース以外にスポットライトを当て、データの分析内容を提示している。

4 研究成果

4-1. 学習者間の話し合い場面（論文②）

この論文では、学習者でも特に初級の学習者に着目し、複数の学習者間において、母語話者や教師などの助けが一切無い対話設定において、話し合いを行っている談話資料を調査した。学習者の履修しているクラス内での課題の一つとしてこの対話がなされたこともあり、「会話を展開させる」という目的は大変大きな影響力をもっている。彼らは、言語的リソースが極めて限定されている中で、会話の展開の優先性 (progressivity) と、質問一応答の連鎖という隣接ペアおよびターンテイキングの優先性 (preference structure, turn-taking order) の二つを満たさなければならない状態にある。彼らの言語活動を考察してみると、まず会話の展開とターンテイキングを円滑に行うために「質問一応答」という形をあえて話し合いの構造として選択していること、が挙げられる。さらに、どのような質問であるか、によって、その回答をすることができる者を、次の話者として選択された者以外にも広げることができるよう作りあげていることが分かった。例として、以下の断片 1 をここで紹介しておくこととする。

断片 1

```

5 VC: =uh:: ABC daigaku de,=
      HES ABC university at
      Uh: in ABC University,
      |VC<->BL=====
6 BL: =uh huh
      Uh huh
      Uh huh
7 VC: Nihon kara (.2) kita (.2) hito (.) e uh: o! mita
      Japan from came person well uh: Obj saw
      |VC<->BL=====
8 koto ga arimasu ka ?'
      Nom S have Q
      |=====
      Have you ever seen someone who comes from Japan?
9-> CL: uh: arimasu yo:
      HES have IP
      |CL->VC=====*((BL nods while looking at VC))
      Uh: yes I have.

```



```

10 VC: soo desu ka:.
      So CP Q
      |VC<->CL=====*((VC nods during the turn))
      Is that so.
11 CL: sensei mo nihonjin desu [ne
      teacher also Japanese CP IP
      Our teacher is also Japanese.

```

後者の「工夫」は、次の話者として言語または非言語的な手続きを通して選択された者が、その役割を全うできないことが、彼らの言語レベルの発達度の段階では多々あることに起因していると思われる。この初級レベルの学習者における話し合い場面の研究は、次に報告をする中上級レベルの学習者間の話し合い談話の分析を行うにあたって、比較を可能とするものとなった（発表⑤を参照）。本年度における成果としては未完成であるが、2012年以降に刊行予定の編著の1章として執筆予定である。

4-2. 教室内活動における教師の意見提示場面の考察（論文③）

この論文では、教育現場におけるコミュニケーション能力の再考を目的に、教師が以下に複数の学生に向かって指導を行っているのか、身体的なリソースの応用に特に焦点をあてて検証を行ったものである。



図 1

図 1 のように、教室で行われる様々な活動の中には、ある特定の学生にのみその指導（学

生の発言に対するフィードバックなど)が与えられるというような、one-to-one コミュニケーションの機会が存在する。しかし、かなりの頻度において、そしてより教師が練達した者であればあるほど、教室という設定において、その特定の学生以外の参加者にとっても何らかの指導の恩恵があるように、教師が自身のフィードバックの仕方を変化させるのである。本論文においては、Schegloff(1998)の body torque の考察や、身体の移動(Streeck2009 他)、さらにジェスチャー(McNeill, 1992 他)などを参考とし、教師が one-to-one コミュニケーションを one-to-many コミュニケーションへと「伝達」の仕方を変化させている点を考察している。以下の断片 2 がその 1 例である。

断片 2

14 but that's ^{*14}very formal ↓ though



Fig. 14. With two hands together, walks towards S1 and S2.

15 ^{*15}(you know) > if ^{*16}you want [to<present yourself] if [in (.)
[16-1, 16-2, 16-3] [16-4



Fig. 15. Body begins to shift towards the class.



Fig. 16. Body shifts towards S2 (Fig. 16. Shifts body to the class, Segment 16-1 through 16-3, performs hand gestures; Segment 16-4, the body shifts to S2.)

16 a formal way. ^{*17}gobusata shitemasu."
"I have not seen you for a long time"

① 発展的な研究成果と、現在執筆中の成果発表の内容

本研究を行う中で、話し合いに参加する学習者らの意見提示場面において、「相手を説得させる」という基本的な目的達成のための実践の他に、話し合いに参加している他の参加者に対する「自己」のアイデンティティ表示を行うことも同時に展開していることが顕著に観察された。この考察を反映し、アイデンティティと言語学習者についての特集を *The Language Teacher* (Japan Association for Language Teachers) という学術誌において編集し、その中で論文①を執筆した。

本研究期間中での研究成果執筆の完成には至らなかったが、現在進行形で執筆を行っている投稿予定論文は以下のとおりである。

IKEDA, K. Turn-dismissing and turn-grabbing laughter in a multi-party conversation (共著者: Don Bysouth) In G. Phillip & Holt, E. (eds.) *On Laughing: Studies of Laughter in Interaction*. Continuum. (学習者の話し合いの中での「笑い」の利用について考察した論文。2012年に刊行予定、投稿依頼を受けている)

IKEDA, K. Japanese and English as competing *lingua francas* (共著者: Don Bysouth). In Heberland, H., Preisler, B., Kirkpatrick, T. (Eds.) *Language alternation, language choice and language encounter in international education*. Springer. (学習者グループの、日本語と英語の言語利用を「Lingua Franca 共通語」という観点から考察した論文。2012年に刊行予定、投稿依頼を受けている)

(5) 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① IKEDA, K. L2 “Second-order” organization: Novice speakers of Japanese in a multi-party conversation-for-learning. *Journal of Applied Linguistics*. (2011 掲載決定)
- ② IKEDA, K. Enriching Interactional Space Nonverbally: Microanalysis of Teachers’ Performance in JFL Classrooms. *Japanese Language and Literature*, 45(1). pp.195-226. (2011).
- ③ 池田佳子 Identity and naturally occurring interaction: An interview with Elizabeth Stokoe. *The Language Teacher*, Vol. 34(3). pp.15-17. (2010).

[学会発表] (計 2 件)

- ① IKEDA, K. “Stylization” in L2 interaction: A case study of learners of Japanese language. *Pragmatics and Language Learning* 18, July 17th, 2010, Kobe.
- ② IKEDA, K. Searching for the ‘right’ style in a second/foreign language: A case of learners of Japanese language” *Sociolinguistics Symposium* 18, Sept. 2nd, 2010, Southampton, UK.

(6) 研究組織

(1) 研究代表者

池田佳子 (IKEDA KEIKO)

関西大学・国際部・准教授

研究者番号: 90447847